

## 解答

⑤

まず、「不惟」という表現に注目しよう。限定形で用いる「惟」「唯」「特」などの副詞と、否定語の「不」「非」を組み合わせると、累加形となり、「不」の場合は「ただに〜のみならず」、「非」の場合は「ただに〜のみにあらず」と訓んで、「〜だけではなく」という意味になる。また、「如此」は慣用表現で「かくのごとし」と訓み、「このようだ」の意である。よって、傍線部を直訳すると、「鮑叔は管仲を宰相に推薦しただけでなく、これを上手く左右したこともこのようであった」となる。

「左右（す）」とはどういうことか。本文を読むと、鮑叔は管仲を宰相に推薦した後も、斉の君主である桓公に質問されるたびに、「管仲（夷吾）の言葉どおりに行うのがよろしいです（必行夷吾之言）」と答えたことが述べられている。「左右（す）」とは、このように鮑叔が管仲のことをサポートしていたことであると捉えられる。

以上を踏まえて選択肢を見ると、①・③は「推薦しただけでは心配で」が累加形の解釈として無理があり、誤り。また、②・④は「管仲もまた」と「左右（す）」の主語を管仲としている点が誤り。残る⑤は、「推薦しただけではなく」「うまく管仲を補佐してもいた」と累加形および「左右」を適切に解釈しており、正解と判定できる。

「左右（す）」の意味が分からなくて迷った人もいたかもしれないが、いま解いたように、累加形の解釈と「左右（す）」の主語で⑤を選ぶことができる。**句法や文構造に着目して選択肢を絞る解法**を、ぜひマスターしてほしい。正答率が飛躍的にアップするはずだ。

選択肢チエック

問 傍線部A「叔<sub>一</sub>不<sub>二</sub>惟<sub>レ</sub>薦<sub>レ</sub>仲、又能<sub>レ</sub>左<sub>レ</sub>右<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>此」<sup>累加「ただにくのみならず」</sup>「かくのごとし」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- A 叔不<sub>二</sub>惟<sub>レ</sub>薦<sub>レ</sub>仲、又能<sub>レ</sub>左<sub>レ</sub>右<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>此
- ① 鮑叔は管仲を宰相に推薦しただけでは心配で、このように自らもまた桓公を通じて政治に関与していたのである。
- ② 鮑叔が管仲を宰相に推薦しただけではなく、このように管仲もまた鮑叔のことを気づかうことができたのである。
- ③ 鮑叔は管仲を宰相に推薦しただけでは心配で、このように管仲が道を踏みはずさぬように導いてもいたのである。
- ④ 鮑叔が管仲を宰相に推薦しただけではなく、このように管仲もまた鮑叔と権力をわけあうことができたのである。
- ⑤ 鮑叔は管仲を宰相に推薦しただけではなく、このように見えないところでうまく管仲を補佐してもいたのである。

主語が誤り

書き下し文

鮑叔固より已に管仲を微なりし時に識る。仲齊に相たるは、叔之を薦むればなり。仲既に相たりて、内に政事を修め、外に諸侯を連ぬ。桓公毎に之を鮑叔に質す。鮑叔曰はく、「公は必ず夷吾の言を行へ」と。叔惟だに仲を薦むるのみならず、又能く之を左右すること此のごとし。真に知己なり。

現代語訳

鮑叔はもともと管仲のことを身分の低い時から知っていた。管仲が齊の宰相となったのは、鮑叔が推薦したからである。管仲は宰相となってからというもの、内政ではこれ執りおさめ、外交では諸侯を糾合した。桓公はことあるごとにこれ（管仲の施策）を鮑叔に問いただした。鮑叔が答えて言うには、「公は管仲の言葉どおりに行い下さい」と。鮑叔は管仲を推薦しただけでなく、このように見えないところでうまく管仲を補佐してもいたのである。真に理解者というべきである。

重要語句

- 固 副詞では「もとより」と訓む。「本来・もともと」の意。
- 相 動詞では「（〜に）しようたる」と訓む。「宰相（大臣）として仕える」の意。
- 「管鮑の交わり」 管仲は、政争に巻き込まれて死罪にされかけたときに、貧しかった頃からの友人であり、その能力を高く評価していた鮑叔に助けられ、大臣に登用されたという経緯がある。「管鮑の交わり」は、「生涯変わらぬ無二の友情」を意味する故事成語として用いられる。

## 解答

⑤

前講に引き続き累加形に関する問題である。副詞の「独(獨)」を用いた場合、「不独(獨)」で「ひとり〜のみにあらず」と訓み、「〜だけでなく」という意味になる。選択肢を見ると、②・④は「ただし」、③は「わづかに」と「独」の訓みが誤っており、消去できる。

残るは①と⑤であるが、「のみ」の位置の違いに注目してほしい。第12講で部分否定と全部否定の違いを説明する際に述べたが、副詞はその下にくる語を修飾する。傍線部は「独今人」であるから、「独」は「今人」を修飾し、「ひとりきんじんのみ」と訓むべきである。よって、「よくせざるのみ」と「不能」を修飾する形で訓んでいる①は誤りで、「きんじんのみ」とある⑤が正解と判定できる。

**漢文の意味は語順(文構造)で決まる**ので、副詞の位置で意味も変わってくる。たとえば、次の例文はどうだろう。

独我勝。 独り我のみ勝つ。 私だけが勝った。(「私」を限定)  
 我独勝。 我独り勝つのみ。 私は勝っただけだ。(「勝」を限定)

副詞が何を修飾しているかということが、解釈の重要なポイントとなることもあるので、たんに訳して終わりというだけでなく、意味をよく考えてほしい。

### 選択肢チエック

累加「ひとりゝのみにあらず」

問 傍線部A「此事 **不<sub>レ</sub>独** 今人 **不<sub>レ</sub>能**、古人亦自少也」の読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① このことひとりきんじんのよくせざるのみにあらず、こじんもまたみづからすくなしとするなり
- ② このことただにきんじんのみあたはざるにあらず、こじんもまたみづからすくなきなり
- ③ このことわづかにきんじんのあたはざるにあらず、こじんもまたみづからすくなしとするなり
- ④ このことただにはきんじんのあたはざるのみならず、こじんもまたおのづからすくなければなり
- ⑤ このことひとりきんじんの**み**よくせざるにあらず、こじんもまたおのづからすくなきなり

☆副詞は直後に来る語を修飾  
※①と⑤の「のみ」の位置の違いに注目！

### 書き下し文

曹孟徳嘗て言はく、「老いて能く学ぶものは、惟だ吾と袁伯業とのみ」と。東坡云ふ、「此の事独り今人のみ能くせざるにあらず、古人も亦自ら少なきなり。」東坡論語解を以て文潞公に寄するの書に云ふ、「就使ひ取る無きも、亦其の窮して道を忘れず、老いて能く学ぶを見るに足るなり」と。予苟かに謂へらく、年齒寢く高くして能く意を学に留むるは、此れ固より易事に非ず。然れども其の中に於ても亦自ら味有り。

### 現代語訳

曹孟徳がかつて言ったことには、「年老いて学ぶことができるのは、私と袁伯業だけである」と。東坡が言うには、「このことは今の人だけができないことではない、昔の人にもおのづからできる人は少ないものである」と。東坡が論語解を文潞公に寄贈した際の書に言うには、「たとえ(この書に)取るべきところがないとしても、私が窮地にあつても学問の道を忘れず、老いても学ぶことのできる人間だということはお分かりいただけるはずです」と。私はひそかにこう思う。しだいに年を取っていつて思いを学問に留めていられるというのは、そもそも簡単なことではない。そうではあるけれども、その中にもまたおのづから味わいがある、と。

### 重要語句

- 与 返読文字で「と」と訓む。
- 就使 「たとひ」と訓み、逆接仮定条件であることを示す。「たと」ヒヽ(な)キモ」と送り仮名している点にも注意しよう。